

第5学年社会科学学習指導案

平成30(2018)年8月24日(金)

東京学芸大学附属世田谷小学校第5学年2組

授業者：宮田浩行(学級担任) 金澤磨樹子(学校司書)

【題材】北海道のホタテ産業

【本時の目標】「ホタテ」産業についての問いを立て、自分の課題意識に沿って必要な情報を収集し、解決に向けて自分の考えを深める

【本時の情報活用の視点】

- ① 問いの中から自分なりの課題を設定し、学習年鑑を1次資料にして必要な情報をつなげていく(資料の連続性)
- ② 同じテーマでも友だちと調べ方の違いがあることを意識しお互いの良さや資料の妥当性を吟味する(協働的姿勢・資料の多様性の尊重)

【本時の展開】

	○学習内容 C：予想される児童の反応 T：教師の働きかけ	●指導上の留意点 ※評価
導入 (3分)	○ホタテ(貝柱)の写真を見る T：何が見える？どんなことを思った？どんなことを知ってる？ C ホタテだ！おいしそう！お腹減った！ C 刺身より焼いた方が好き！ C 北海道とか青森がホタテで有名	●いきなり知識を問わず、感覚的な言葉になるべく多く出るようにし、ウォーミングアップにする ●殻付きの写真でなく剥き身
展開 (32分)	○映像を見る：「枝幸のホタテ漁」(4分) T：映像を見ながらたくさん「？」を出そう C：どんな場所で獲れているんだろう？ C：農業をしている人は勉強したけど、漁業で働いている人の人数や年齢は？ C：ホタテを投げていたけど何をしていたんだろう？ C：どうして新鮮なホタテを食べられるんだろう？ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学習年鑑をつかって「？」を調べてみよう！</div> ○課題意識に応じてグループに分かれ学習年鑑で「？」を調べる →様子を見て2次資料へ移行 (ジグソー活動) ○グループを組み直し全体像をひろげる (エキスパート活動)	●映像を見ながらノートに「？」やつぶやきを記すよう声かけをする ●加工して字幕の無い映像に ●「えー？」や「なんで？」といったような児童の反応に対して細かく問い返し、全体で共有する ●調べている様子を見ながらエキスパート活動で組むメンバーを考える：児童とは活動の目的を共有できるようにする
まとめ (10分)	○グループ内で調べたことについての自分自身が感じたり考えたりしたことを伝え合う(クロストーク活動) ○感想を付箋に書く	※自分で設定した問いに対して情報を集め、自分なりの考えを構築しようとする(活動)

【情報活用のために】

今回の授業では情報活用のために「ジグソー法」を取り入れる。主発問が『学習年鑑をつかって「？」を調べてみよう！』という活動の方向性を示すものなので、最後の「クロストーク活動」の本来的な意義には到達できないが、「エキスパート活動」では同じ「？」にアプローチするためにグループのメンバーで学習年鑑や他の資料を活用しながら試行錯誤すること、「ジグソー活動」では友だちが異なる「？」について追究したり資料を活用したりしたことを肯定的に受け止められるようにすることを主眼として積極的に取り入れた。教師主導ではなく児童一人一人の良さや意欲がどれだけ発揮されるか、どれだけ情報活用の力に繋がるのかの試行である。

【学習年鑑で調べられること】

p.154 「おもな漁港別の水あげ量」→ホタテの水揚げが多い都道府県、地域がわかる

p.153 「魚のとれ高（魚種別）」→2016年の「G貝・海藻類」は35万t

p.101 「北海道」→「水産業」の項目では日本一がたくさん

※このような一次資料の情報から「水産業ではたらく人」や「ホタテについて」などについて「？」を見出し調べ活動に進んでくれることを期待する

【なぜホタテなのか】

◎「廃棄量」の意識

1学期の最後の給食で児童はトウモロコシを食べた。そのトウモロコシは自分たちで朝から皮むきをしたのだが、その際に主導していた栄養教諭から食品の「廃棄量」の話題が出た。1学期は社会科の学習で農業に関する食糧生産について学習をしていたが、学習の中では意識していない新しい視点であった。生活の中で「おいしさ」を感じるのは「可食部」であり、「廃棄部」は可視化されることがない。今回ホタテを題材にすること、さらには導入で剥き身のホタテの写真を提示することで、廃棄部の殻について少しでも意識が向けば幸いである。

◎貝殻をチョークに

北海道のホタテの殻は炭酸カルシウムとしてチョークの原料になっている。近年学校現場では「エコで身体にも優しいチョーク」として割と知名度が高いが、本校でも使用しており、子どもも日常的に利用する身近なものである。

さらにそのチョークを製作している会社は「日本理化学工業」という川崎にある会社であり、子どもたちの生活範囲にも重なる場所に立地している。そしてその日本理化学工業という会社は全従業員の8割近くの雇用者が知的障害者である。2学期の工業単位では、この会社を中核としたチョークの製造工程そして「人がはたらく」ということをテーマに子どもと共に追究をしていく計画を立てている。本時ホタテを扱う意義は2学期以降の学習につながってくる。